

元号「令和」は万葉集の詩の言葉から生まれた 「令和」は詩の言葉 日本人の哲学

「万葉集」巻5「梅花の歌32首」の序文。
730(天平29)年の正月、大宰府の長官だった大伴家持が、梅の花を眺めて
歌を詠む宴の始まりを告げたものです。

初春令月 気淑風和

「初春の令(うるわ)わしい月、空気が淑やかで、風が和(やわら)かである」という意味。
令和はこの表現から生まれたわけです。

これまでの元号は、平成のように「地平らかに天成る」のように
中国の古典にある抽象的な概念からとったものでした。
所が令和の場合は、「令しい月、風が和かだ」という自然描写。

この変化は「典拠が漢籍から国書になった」ことを象徴しています。

日本人は自然そのものに哲学を見てきた民族です。
自然描写から生まれた元号こそ、日本人にふさわしいと思います。

春まだ浅い頃、まず梅の花がほころぶのを見て、四季を巡らせる大きな力を感じる。
空をゆく雲を見れば失恋してあてどない人の心と等しいと思う。
このように、自然に寄せて思いを述べた歌が日本の和歌にはたくさんあります。

自然から抽象的な思考を発展させるのではなく、自然そのものを哲学を宿した存在として
受け止めてきたのが日本人です。
自然は常に人間を導くもので、西洋のように征服の対象ではありません。

世界の詩形の中でも、季語を必要条件とする日本の伝統俳句は極めてユニークです。

日本人はきっと、令和という元号を散文のことばではなく、詩の言葉として受け取っている
のではないかと思います。見事な日本の感性ですね。